



2022年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/9/13

団体名	認定NPO法人ラ・ファミリエ	活動タイトル	病気のある子どもへの遠隔学習・余暇支援実施可能な人材育成と学習支援活動成果の評価		
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景		
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>当法人は「子どもが子どもらしく生活し、成長することのできる社会」づくりを目指している。 変化する現代において、病気や貧困、虐待など子どもたちが置かれている状況は様々である。しかし、どのような状況下であっても子どもが教育を受けること、主体的に学ぶことができる機会が保障されていることは子どもの権利である。当法人が支援している子どもたちのように、病気による入院や長期療養のため、学校に通うことのできない状況に陥ったとしても、子どもの学習の機会や人との関わりの経験は最大限、保障されていなければならない。子どもたちが学びを深め、遊び、子どもらしく成長していくことのできる社会づくりをめざす。</p>		<p>学習支援ボランティア研修会受講生が学習支援をしている様子</p> 		
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>当法人の社会的役割(ミッション)は病気の子どもたちが病気や障害を乗り越えて、社会的自立に向け、成長発達することを支援することにより、共生社会の実現をめざすことである。 1)入院や長期療養などにより学習や人との関わりについてのニーズが生じている子どもたちに対する学習・余暇支援を実施し、学齢期の育ちを支援する。 2)病気の子どもたちとその家族への相談支援事業等を行い、家族ごと支援することで、子どもたちが安全・安心に成長していく支援を行う。 3)病気の子どもたちに関する啓発活動を行い、病気や障害があっても共に生活できる地域社会づくりに貢献する。</p>			<p>成果報告会での全体討論の様子</p> 	
<p>●団体の活動基盤</p>	<p>当法人が上記の社会的役割を十分に果たすには以下のような活動基盤があることが理想的である。 ●望ましい人的資源：学習指導や病気療養児の心理・生理に関する専門性のあるスタッフや教育支援者を経常的に育成するための専門的な知識技能のある人材 ●望ましい物的資源：病院内で利用可能なインターネットや、遠隔での学習支援を可能とするICT機器や通信ネットワーク環境が構築されていること。 ●望ましい活動資金：学習支援者の交通費 ●望ましい人的資源：学習支援者や希望者のマッチングをするスタッフの給与と交通費 ●望ましい情報：病院内で活用可能なインターネット環境の構築に関する情報。</p>				<p>■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)			
<p>1)病気のある子どもたちを対象としたICT機器を活用した遠隔学習・余暇支援のできるボランティア育成のための研修会実施 病気のある子どもたちの学習支援に関する研修会をR4年10月～R5年2月（第1期）とR5年5月～8月（第2期）で実施した。研修は個人面談を含む全6回で構成した。第1期と第2期で合計17名が研修を修了した。</p> <p>2)入院や長期療養などにより学習ニーズや人との関わりの必要性が生じている子どもたちに対するICT機器を活用した対面ないし遠隔学習・余暇支援実施と成果の評価 個人面談を終え、対象児との都合が合う受講生が学習支援ボランティア実習にあたった。事業期間中の学習支援実施回数が430回、昨年度比が約102%であり、病気のある子どもたちに継続して学習支援を届けることができた。</p> <p>3)医療機関・保護者への啓発活動：チラシ作成、公開講演会の実施 R5年7月15日に、副島賢和先生の基調講演を含む、愛媛県内の小児科医、学習支援ボランティア等を講師としたハイブリッド型の成果報告会を実施した。参加者アンケートでは、回答者の95%以上が5段階評価で「5とても満足している」「4満足している」と回答した。また、学習支援や学習支援ボランティア研修会に関する内容をHPやFacebook等で発信することで理解啓発を図った。</p>	<p>(1) 研修前後のルーブリック評価を比較すると、「知識・理解」の自己評価A(最高値)が30%から78%に向上、「思考・判断・表現」の自己評価Aは11%から59%に向上、「技能」の自己評価Aは15%から48%に向上、「関心・意欲・態度」は0%から33%に向上しており、研修を通して学習・余暇支援に従事できる知識技能等を身に付けられたといえる。</p> <p>(2) 新型コロナウイルスが5類に移行後、オンラインの学習支援だけでなく対面での学習支援を実施することができた。事業期間内には小中学生から高校生までの幅広い年齢層の学習支援に対応することができた。学習支援ボランティアを受けた子どもや保護者から「子どもの学びたいという気持ちを上手に引き出した」「支援を受けることで将来のことを考え始め、自分ができることは何かを考えるようになった」「基き気味な気持ちがかげくなった」「話し、笑い合うことで「今」の自分と向かい合い、学習と治療に取り組んでいる」などの声があった。</p> <p>(3) 成果報告会には、医療関係者や福祉関係者、教育関係者、当事者やボランティアなどが参加した。病気のある子どもたちの現状や支援、連携体制についての気付きを得られたという声が寄せられ、病気のある子どもたちを取り巻く課題や福祉・医療・教育、地域資源や子ども・家庭も含めた連携体制の必要性について周知啓発できた。</p>				
■ 事業を通して得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題			
<p>①子どもに合わせた対面または遠隔による学習・余暇支援に関する知識・技能 実際にICT機器等を活用して遠隔学習支援を行ったスタッフやボランティアの事例や工夫が蓄積でき、オンライン会議システムで支援をする際の姿勢や便利な機能、おすすめの学習アプリなど、今後の効果的な遠隔学習支援のためのアイデアを得ることができた。また、知的障がいのある子どもとの対面の学習支援、小学校低学年の子どもとの学習支援などにおいて、既存のワークやプリント等ではなく、子どもの興味関心や好きなものを取り入れた教材・教具作成に取り組んだことで、子どもの発達段階や興味関心に合わせた学習支援の方法について、知識や技能を得ることができた。</p> <p>②学習支援ボランティアや関係者等との情報共有・連携体制 定期的に情報共有会をする日程を決めておくことで、メールや電話ではなく直接顔を合わせて話す時間ができ、対象児についての情報共有が円滑にできるようになった。また、支援者同士の関係構築にも繋がり、連携体制が強化されたと言える。</p>	<p>病気のある子どもたちの教育的ニーズに応じた支援を実施できるよう、県内におけるニーズの把握と学習・余暇支援、支援者の育成を継続していく必要がある。しかし、本来であれば、公教育による早急な学習機会の実証が必要である。学習支援を実施していくだけではなく、多くの人に病気のある子どもたちが「学習したくても教育が届きづらい」という状況にあることを知ってもらえるよう、在籍校との調整や広く理解啓発を図っていく必要がある。</p>		<p>この1年間の活動を通して</p>	<p>入院・療養中の子どもたちへの学習・余暇支援を継続できる人材育成と病気のある子どもたちの学習や余暇活動に関する理解の基盤づくり</p> <p>を達成しました。</p> <p>■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p> <p>①学習支援者：ルーブリック評価や日々のやり取り等から、研修会を通して、病気のある子どもたちへの学習・余暇支援についての知識技能を概ね習得した人材が育成できたと言える。今回実施した研修プログラムは、有効であったと考えられる。 ②病気による入院・長期療養中の子どもたち：学習支援を受けることで、学習の補填や学習意欲の維持、将来に向けた展望の形成、関わりの中で気持ちの整理や吐露、そして楽しい時間を通じた気分転換の時間となったという声が寄せられている。 ③病気のある子どもを取り巻く人々：成果報告会参加アンケートの回答では、回答者の95%以上が満足したと回答している。医療関係者や福祉関係者、教育関係者、当事者やボランティアなど病気のある子どもたちを取り巻く課題や福祉・医療・教育、地域資源や子ども・家庭も含めた連携体制の必要性について周知啓発できた。</p>	